

スペイン思想の 20 世紀

——ハビエル・スビリの最後の言葉をめぐって——

木 下 登

20 世紀があわただしく過ぎ去り 21 世紀に入って間もない現時点において、スペインの現代思想の特徴を多少ともまとまりのある形で捉えようとするのはもとより時期尚早の感を免れえないが、本稿では、ハビエル・スビリがその晩年に公の席で自らの哲学思想の根本について述べた記録を基にして、広汎なスペイン思想の 20 世紀の一面を考える一つの研究ノートとしたい。

- I. 20 世紀におけるスペイン思想史構築の歩み
- II. ウナムーノ、オルテガ、スビリ
- III. スビリ「研究とは何か」

I. スペインの 20 世紀は、通例 1936～39 年の 3 年間におよび内戦を境に戦前、戦中、戦後に大別される。また戦後は 1975 年まで続いたフランコ総統による独裁体制期とそれ以降の民主的な時代とに二分される。以下、19・20 世紀におけるスペインの動きを思想史の確立の側面から概観しておきたい。

1492 年のコロンブスによる新大陸到達を出発点として形成されたスペイン帝国は、1571 年のレパントの海戦における勝利と 1580 年のポルトガル併合を期にその頂点を極めた。しかし、早くもその 8 年後には無敵艦隊がイギリス海軍に敗れ、1898 年の米西戦争における敗北へと、ほぼ 3 世紀間におよぶデカダンスの坂をくだり始めた。スペインの 19 世紀は、政情不安に大きく揺れ動き、不安定な社会情勢を露呈した。

スペインの衰退とそれに対する刷新の動きは、18 世紀には啓蒙主義者と伝統主義者の間の対立となって表面化した。1808 年のナポレオンによる侵略やフェルナンド七世の死去にともなう王位継承戦争に端を発したカルリスタ戦争など、相対立する二つのスペインは戦いを繰り返した。19 世紀半ば、こうした政治的混乱がますます顕著になる一方で、知識人たちによる壮大な教育改革の施行やスペインに固有な思想の存在を問う学問論争の火蓋が切って降ろされた。

スペイン人の知的ルーツの掘り起こしに尽力した第一の人物は、メネンデス・ペラー

ヨ (1856—1912) で、彼は『スペインの学問』(1876)、『スペイン異端史』(1880—82)、
『スペインにおける美的観念の歴史』(1883—91)等において、スペイン思想史研究の
その後の方向性に重要な一石を投じた。彼の弟子ボニーリャ・イ・サンマルティンは、
「スペインにおける哲学思想の歴史的展開をたどり、固有の特質を備えた哲学がイベ
リア半島に存在したことを跡付けるために」という意図のもと、1904年、壮大な「ス
페인哲学史試案」を発表した。彼自身、その案に沿って、ローマ期から12世紀にお
けるユダヤの哲学者たちについて、二巻の書(1908, 1911)を出版した。彼の案に呼
応して、カレラス・アルタウは『18・19世紀のキリスト教哲学』(1939, 1943)、マル
シアル・ソラーナは『16世紀、ルネッサンス期の哲学』(1941)、クルス・エルナンデ
スは『イスラーム・スペイン哲学』(1957)と題して、それぞれ大部の書を著した。ボ
ニーリャの著作計画が引き継がれていく一方で、スペイン思想史全体を一巻に著す試
みも実現していった。サラマンカ・カトリック大学のギリエルモ・フライレは、1971
から1972年にかけて、詳細な参考文献を付した『スペイン哲学史』を出版した。1977
年、コミーリャス大学のマルティネス・ゴメスは、マドリード大学のアベリャンと共
に、「偏りのない通史」を求めて、『スペイン思想史—セネカからスピリまで—』を出
版した。さらにアベリャンは、1979年、ボニーリャに始まり、多くの研究者たちによ
って引き継がれたスペイン思想史を一つに総合する試みを開始した。『スペイン思想批判
史』と題された彼の書は、1992年まで25年の歳月をかけて七巻をもって完成された。
また1996年には、同書の内容を『スペイン思想史—セネカから今日まで—』と題して、
扱いやすい一巻にまとめて出版した。アベリャンの著作をもって、一世紀にわたって
繰り広げられたスペイン学問論争(スペイン固有の学問の存在を実証的に問う)は大
きな結末を迎えたと考えられる。

20世紀のスペイン思想を顧るに、オルテガによって一つの頂点を築いたが、内戦後
の1939年から37年間にわたるフランコ体制下において、思想はとりわけ困難な状況
を余儀なくされた。しかし結果として、スペインにおける思想研究は、その本質を求
めての掘り起こしから独自の哲学の構築へとたくましい歩みを記したといえよう。こ
うした中で、フランコ時代には、「スペイン哲学週間」(ルイス・ビーベス高等研究所
主催、1959年)と「若い哲学者たちの学会」(1963年)が、継続と刷新において中心
的役割を果たした。1975年以降、完全な思想的自由が保障される時代になると、『サ
ラマンカ哲学論集』(1974年)を含め多くの哲学雑誌の発刊が続いた。1976年にはウナ
ムーノの街、サラマンカのカトリック大学からは『サラマンカ哲学論集』が出版され
た。1978年にはサラマンカ大学のエレディア・ソリアーノは、クルス・エルナンデス、
アラン・ギー(フランス、トゥルーズ大学)、アベリャンといった碩学を軸として、国
際学会であるスペイン・イberoアメリカ哲学史学会を組織し、スペイン思想史の確立
だけでなく、広く「イスパニスム・フィロソフィコ」(スペイン語で表現された哲学)

の研究と発展に大きな貢献を果たした。1988 年には、オルテガ、スビリ等の伝統を誇るマドリード大学においても哲学史学会が組織され、『イスパニスモ・フィロソフィコ』誌を刊行するなど現在も活発な活動が展開されている。

II. 20 世紀における独創的なスペイン思想は、ウナムーノ、オルテガ、スビリをもって代表される。ウナムーノとオルテガは、祖国の再興という問題を前にしてその思想的立場を異にした。ウナムーノは、スペインは理性主義よりも精神面を優先させるべきであると唱えたが、オルテガはスペインの近代化はヨーロッパ化にあるとして対立した。1920 年代にはオルテガを中心として、マドリード大学哲学科には優れた学者が輩出し、オルテガ・ルネッサンスとも称される知的状況が出現した。1936 年、共和派と保守派の対立が激しい内戦に行き着くと、オルテガを始め多くの知識人が亡命の途についた。彼らの中には終生異国の地に留まる者も多かった。一方、祖国に戻った者の多くは公職に就くことなく沈黙を余儀なくされた。こうした中で、ハビエル・スビリはハイデッガーの存在論の超克を志向し、形而上学の立場から独創的な哲学の構築へと終生努力を継続した。ここではまず始めに、わが国ではいまだ知られるところの少ないスビリの生涯を簡略に紹介しておきたい。そしてその後で、スビリがその 85 年に及ぶ生涯においてただ一度だけ受けた賞である「サンティアゴ・ラモン・イ・カハル研究賞」授与式の機会に、自ら語ったスビリ哲学の本質を表す貴重な内容の講演を紹介しておきたい。

ハビエル・スビリは、1898 年、サン・セバスチャンに生まれた。神学校を経てカトリック司祭として叙階。1918—1920 年、マドリード大学哲学科にて、ホセ・オルテガ・イ・ガセット、フアン・サラグエタ、マヌエル・ガルシア・モレンテらの下で哲学を学んだ。1919—1921 年には、ベルギーのルーヴァン大学哲学高等研究所に学び、1920 年に哲学の修士号を受けた。同年には、ローマのグレゴリアン大学から神学博士号を授与された。翌年にはオルテガの下で、マドリード大学にて哲文学博士号を取得。1926 年、同大学にて哲学史の教授職に就いた。1928—1931 年、フライブルク大学に留学。一年目にはフッサールに、二年目にはハイデッガーに学んだ。三年目はベルリン大学にて学び、アインシュタイン、プランク等と親交を結んだ。その間、パリ、ミュンヘンなどでも哲学や神学を研究。数学をレイ・パストゥール、物理学をシュレディンガー、ギリシア哲学をイエーガーに師事した。1931 年、マドリードに帰って教壇に立つ一方、活発な研究活動を展開した。1936 年に還俗し、歴史家アメリコ・カストロの娘カルメンと結婚した。スペイン内戦が勃発すると祖国を離れ、1936 年から 1939 年にかけてローマやパリにて講義をするとともに、デイメル、ベンベニスト、ラバット、ドルムなど優れた学者の下で東洋語等の習得にも励んだ。内戦後の 1940 年には、バルセロナ大学にて哲学史の教授職に就いたが、1943 年には辞職してマドリードに居を定めた。

1944年には『自然・歴史・神』を、その18年後の1962年には『本質について』を出版した。1972年には高弟たちによって「ハビエル・スビリセミナー」が設立され、機関誌『レアリタス』(Realitas)が発刊された。1980—1983年に、『感覚的知性』、『知性とロゴス』、『知性と理性』、『哲学的人間学についての7つの試論』といった大著を次々出版。1983年、マドリードにて他界。3万ページにのぼる遺稿から現在までに、『人と神』、『人間について』、『実在の動的構造』、『西洋形而上学の諸問題』、『空間、時間、物質』、『人間の神的问题』、『人間と真理』、『初期の著作』等が相次いで出版されている。

III. スビリは、スペイン初のノーベル医学賞受賞者サンティアゴ・ラモン・イ・カハルの名を冠した科学研究をたたえる賞を、セベロ・オチョア(ノーベル医学賞)と共に受賞した。彼の記念講演の全文は《研究とは真の実在探求をすること》と題してスペインの伝統的日刊紙「Ya」に掲載された。("Discursos de recepción del Premio Santiago Ramón y Cajal a la Investigación Científica", *Ya*, Madrid, 19 de octubre de 1982, p. 43.) 次にその全文を邦訳しておきたい。

サンティアゴ・ラモン・イ・カハル研究賞の授与式に来ております。賞の重要性につきましては、すでに詳しい説明がありました。それはスペイン社会が皆様を介して私たちに与えてくださった褒美です。賞の授与に対する私の感謝の気持ちを一番よく表すために、皆様が寛大にも賞の対象としてくださった、この「研究」ということについて私の考えを簡潔に述べさせていただきます。

研究されるものは何でしょうか。明らかに私たちは真理を研究するわけですが、それは、私たちが考えている事柄等についての真理ではなく、実在そのものについての真理です。その真理ゆえに、私たちは実在なるものを《真の実在》(realidad verdadera)と呼ぶのです。それは、物理、数学、生物、天文、精神、社会、歴史、哲学など、たくさんの分野に関わる真理です。

ところで、この真の実在はどのようにして研究されるのでしょうか。真の実在研究とは、実在との単なる《関わり》(ocupación)ではありません。確かに一つの関わりではありますが、単なる関わりではありません。それはずっと大きなこと、すなわち、《献身》(dedicación)です。研究とは、真の実在に身を献ずることです。《献ずる》(dedicar)とは、特別な力でもって(de)何かを示す(deik)という意味です。知的な献身という場合、この力によって、実在が示すままに我々の精神が形づくられる、または形成されることであり、我々に示されたものを他の人々の考察に提供することです。献身とは、真の実在が我々の知性を形づくるようにすること。この形成作用によれば、知性を使って生きることは、《表明》(profesión)と呼ばれます。研究者とは

真の实在を表明する人のことです。

この職業はどこか特殊なところがあります。目の前の实在と関わるだけの人は研究をしていません。その人は、真の实在またはその一部を《所有》しているだけです。しかし、真の实在に献身する人はある意味でその反対です。真理を《所有する》のではなく、その反対に、真理によって《所有される》のです。研究においては、我々は真の实在に手を引かれて進むのであり、それに《導かれている》(arrastrados)のです。この導くということが研究というものにある動きに他なりません。

この導くという条件が研究ということに独特な性格を与えます。それは我々を導く实在に由来する性格です。

そもそもすべて実在なるものは、おのおの他の实在との関係においてあるものです。他の实在との関係になれば、何一つ実在的なものはない。すなわち、すべて実在なるものは自ら本質的に《開いている》ということになります。他の事物、それは探さねばなりません、そうした事物の側からの理解があってはじめて、我々は理解したいと思う事物が何であるかを理解することになるのです。こうして我々は事物が実在中にあることを悟るのです。实在が我々を導き、その導きによって事物を知ろうとすることが探求への動きとなるのです。同様に、我々が理解しようとするのがらの理解は他の事物からということであり、結果として我々は实在に導かれ、尽きることのない動きの中に巻き込まれていることになるのです。研究が尽きないのは、人間には实在の豊かさを汲み尽くすことができないこと、そして何よりも实在が根源的に尽きないものであること。すなわち、实在そのものが自ら本質的に開いていることにあるのです。私にはそれが聖アウグスティヌスの有名な言葉の根本であるように思えます。「まだ見つけていないひとが探すように探そう、そうすれば、まだ探さなければならぬひとが見つかるように、私たちは見つけるであろう。」実在なるものは決して尽きることがないことから、何かが実在中にあることを研究することは尽きることのない業となります。

实在は開いていて多様である

しかし、实在は開いているだけでなく多様でもあります。そしてそれは少なくとも二つの面においてです。

第一に、たくさんの実在的な事物があり、その一つ一つが独自の性格を備えていること。実在的な事物に特有な徴表または性格を研究することこそ科学分野での研究に他ならず、そのことによって諸科学が成立します。《科学》とは、事物が実在中にあるということの研究です。

しかし、第二に、実在なるものが多様であるということは、事物にはたくさんの異なった特質があるから、しかも私の見方ではさらに深い理由から、すなわち開いてい

ることが実在本来の性質であるからです。

そしてこのことから、研究というものが実在なるものの諸特性についてではなく、実在の性格そのものへと導かれることになります。この研究は別のタイプの知で、それこそ私が《哲学》と考えるものです。それは実在的な存在とは何であるかを研究することです。

諸科学が、実在的な事物がどのように存在し、どのように生起するかを研究するのに対して、哲学は実在的な存在が何であるかを研究します。科学と哲学は異なっていますが、独立したものではありません。あらゆる哲学は諸科学を必要とし、あらゆる科学は一つの哲学を必要とします。それらは研究における二つの統一的な要素です。しかし、要素としては同一ではありません。

この何が実在的な存在であるかという問題は、何にもまして、それ自体が重大な問題です。というのは、事物はさまざまな特質や法則からなる非常に豊かな総体であるだけでなく、実在的な事物とその特質はおのおの実在的な存在の一樣態、つまり実在の一樣態であることです。事物はその特質においてのみ異なるのではなく、それ本来の実在的な存在様態においても異なりうるのです。例えば、事物と人間の間にある違いは、根本的には実在様態の違いです。人間とは実在的な存在の一樣態です。事物であるものと人間であるものを捉えることが必要であり、したがって、実在的な存在とは何かを研究しなければなりません。なぜなら、事物と人間には異なった実在様態があるからです。

個物が我々の在り方を規定する

しかし、この捉え方なりこの実在様式にある違いなりは《重大な》問題です。我々人間は確かに事物《と共に》生きています。こうした事物の多様性と豊かさが何であれ、我々がそれらと共にあるのは《具体的な》実在の中においてである。我々が接している事物の一つ一つが実在における我々の存在様態を規定するのです。このことは決定的です。我々が、実在とその諸様態について深く考えによって、我々の人間としてのあり方、事物や他の人々とのあり方が左右されます。我々の社会組織とその歴史が左右されます。そこに、実在的な存在が何であるかについての研究の重大性があります。それは、事物自体によって与えられた研究です。実在の事物によって我々に与えられるものは、その実在性です。この与える力が《実在なるものの力》です。それは、あるがままの実在であり、その特質だけではなく、我々を導き支配するものです。したがって、実在なるものの力が実在や知性の内的なまとまりを構成しており、それはまさに哲学の進展そのものです。

ヘーゲルはこう書いています。「固有の政治法、信条、道徳的習慣や美德が役に立たなくなってしまった民族も驚きであるが、自分たちの形而上学を失った民族の光景は

さらに衝撃的である。」

実在的な存在が何であるかを研究することは、《たいへん難しい課題》です。だからプラトンは哲学を学び始めた若い友人にこう言ったのです。「君を事物の理^{ことわり}へと向かわせる燃えるような衝動は美しく神聖である。一見何の役にも立たない、庶民が無益な言葉遊びと呼ぶ、こうした哲学的な努力において若いうちに習練を積むように。そうしなければ、真理は君の手から逃げていくことだろう。」プラトンは、その長い生涯にわたってこの努力に身を捧げました。失望したときもありました。またある時は、「実在を研究していて気を失った」、とも書いています。科学と哲学の間の相違と一致を一番よく知っている人の一人が我が敬愛する友人セベロ・オチョア氏です。この意味でも、また古くからの友人であることから、この場にセベロ・オチョア氏のご同席してくださっていることは、私にとりまして、この賞の本質的な要素となっています。

研究とは何かについて考えを述べてきましたが、皆様はいま、哲学についても考えてくださいました。これは初めてのことです。このことにより、私だけでなくすべての哲学の研究者が極めて正当に報いられ満足に思っていることでしょう。皆を代表して感謝申し上げます。

以上

ハビエル・スピリの著作一覧

- Le problème de l'objectivité d'après Ed. Husserl, I: La logique pure* (These de license. Institut Supérieur de Philosophie, Université Catholique de Louvain, 1921).
- Ensayo de una teoría fenomenológica del juicio* (Imprenta de la «Rev. de Archivos, Bibliotecas y Museos», Madrid, 1923).
- Naturaleza, Historia, Dios* (Madrid, 1944).
- Sobre la esencia* (Madrid, 1962).
- Cinco lecciones de filosofía* (Madrid, 1963).
- Inteligencia sentiente, Inteligencia y realidad* (Madrid, Alianza, 1980).
- Inteligencia y logos* (Madrid, Alianza, 1982).
- Inteligencia y razón* (Alianza, Madrid, 1983).
- Siete ensayos de antropología filosófica*, Ed. G. Marquín Argote (Bogotá, USTA, 1982).
- El hombre y Dios*, Ed. I. Ellacuría (Madrid, Alianza, 1983).
- Sobre el hombre*, Ed. I. Ellacuría (Madrid, Alianza, 1986).
- Estructura dinámica de la realidad*, Ed. D. Gracia (Madrid, Alianza, 1989).
- Sobre el sentimiento y la volición* (Madrid, Alianza, 1992).
- El problema filosófico de la historia de las religiones*, Ed. A. González (Madrid, Alianza, 1993).
- Los problemas fundamentales de la metafísica occidental*, Ed. A. Pintor-Ramos (Madrid, Alianza, 1994).
- El espacio, el tiempo, la materia* (Madrid, Alianza, 1996).

El problema teologal del hombre: Cristianismo (Madrid, Alianza, 1997).

El hombre y la verdad (Madrid, Alianza, 1999).

Primeros escritos (1921-1926) (Madrid, Alianza, 2000).

ボストンに設置された北米ハビエル・スビリ財団を軸として、スビリ哲学を紹介するホームページが充実しており、昨年からスビリの主要な著作と英訳書がダウンロードできるようになった。

<http://www.zubiri.org> (北米ハビエル・スビリ財団)

<http://www.zubiri.net> (ハビエル・スビリ財団)

(本稿は、2001年2月22日のヨーロッパ研究センター定例研究会で行われた発表に関連したものである。)